

2020. 1. 1

No.216

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

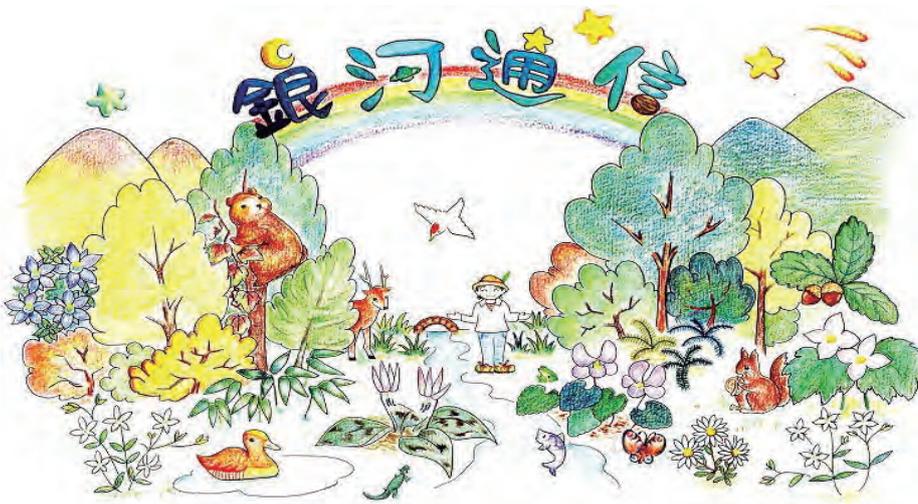
minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,500円)



2020年に希望を託して



背後にそびえるエベレスト（左）とヌプツェ
（2001年4月日本山岳会ヒマラヤ環境調査に参加した時にみな子撮影）

2019年が終わりました。特に、「表現の自由」や「知る権利」が奪われる事態に危機感をこれほど抱いた年はなかったように思います。「あいちトリエンナーレ」の一時中止や補助金の不交付につづいて札幌でも、選挙演説していた首相に「安倍やめろ、帰れ！」のヤジを飛ばした男性が5～6人の警官に取り囲まれ、体をつかまれ後方に移動させられたり、「増税反対」と叫んだ女性も同様に後方へ移動されたのです。私は翌日の新聞記事とTVニュースで知りました。

11月に来日したフランシスコ・ローマ教皇のスピーチは心に深く響きました。「今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられています。しかし、武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは途方もない継続的なテロ行為です。核兵器から解放された平和な世界。それは、あらゆる場所で数え切れないほどの人が熱望していることです。この理想を実現するには、すべての人の参加が必要です。個々人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国も、非保有国も、軍隊も民間も、国際機関もそうです。核兵器の脅威に対しては、一致団結して応じなくてはなりません」（長崎で）「戦争のための強力な兵器を製造しながら、平和について話すことはできません。武器を手にしたまま愛することはできません」（広島で）と戦争の悲惨さと核兵器使用・保有の恐怖を訴えました。

宗教者のここまで踏み込んだスピーチはいままであったでしょうか。感動しました。福島に被災者にも会い、原発は止めるべきだとも述べました。

「武器よりも命の水を」と戦乱や干ばつで荒廃したアフガニスタンやパキスタンで、35年にわたって医療活動やかんがい事業を行ってきた医師の中村哲さんが、12月4日アフガニスタンで銃撃されて73歳で亡くなりました。中村さんをしのび、その15年にわたる不屈の歩みを記録した2016年の番組がNHKEテレで再放送されました。白衣を作業着に替えて、何度もの試行錯誤の末にマルワリード用水路と名付けた水路は1万6千haもの農地を潤し、60万人のアフガニスタン人を救いました。緑がよみがえり米を作る人々が「飢えずに安心して暮らせる」「戦争に行かずに済む」と語る姿と、子どもたちが楽しそうに学ぶ姿が素敵で、平和って、家族がそろって暮らせることなんだと思いました。

ジャーナリストの伊藤詩織さんが性的暴行を受けたとして元TBS記者の山口敬之氏に慰謝料を求めた民事訴訟の判決で、12月18日勝訴しました。本当に嬉しかったです。詩織さんは激しいバッシングにどれほど傷つけられたでしょうか。初めて裁判を傍聴した詩織さんの母は「山口さんの娘が同じことをされたら、どんなに耐えがたいか想像してほしい」と述べていました。泣き寝入りせず、訴えたことは、性暴力に苦しんできた女性たちをどんなに勇気づけたかと思います。詩織さんへの心無いバッシングは直ちにやめていただきたいです。

香港の学生たちが、民主化デモで命がけで闘う姿に、日本も戦前の言論統制に戻ってはならないと教えられました。黙っていたら社会はとんでもない方向に進んでしまいます。

植村裁判は2020年2月6日に札幌控訴審と3月3日東京控訴審で判決を迎えます。

「捏造」記者というバッシングに立ち向かい真実を勝ち取る闘いを支援してくださった読者の皆様に感謝します。（2ページに続く）

「植村裁判NEWS2019-2020」を植村裁判を支える市民の会で発行しました。録音テープを完全に再現した金学順さんの証言や、和田春樹氏が従軍慰安婦問題の基本的な論点を説いた意見書などです。渾身の力を込めて、植村さんと弁護団が真実を追求した記録です。紙通信読者には同封しました。是非ご一読いただき、ご理解を深めていただければと思います。

2019年後半は夫の病気と向き合い、生きていることは当たり前ではないと知り、生かされている意味を考え続けました。住みやすい社会になるように私も小さな努力を重ねたいと思います。

2020年がみなさまにとって希望があふれる年であることを願っています。拙い通信ですがこれからも応援をよろしくお願いします。



雪帽子をかぶったナナカマド

2019年11月と12月のキリバリから（m.mさん提供）紙面の都合で、中村哲さんと八千草薫さんの死を悼んで、関連する論評を選びました。

憲法9条の殉教者 一気高い理想と篤実な精神 ゆえの偉業と受難 世に倦む日日 2019.12.9

8日のサンデーモーニングの「風をよむ」で暗殺された中村哲の特集が放送された。その中で、中村哲が9条擁護論者であり、講演の機会に、9条の意義を熱心に説き訴えていた映像が紹介された。「何百万もの犠牲の上に築かれた金字塔であり、民族の理想であり、同時に世界の人々の理想である」と語っている。事件後のテレビ報道で、初めて、9条平和主義者としての中村哲の姿が正面から伝えられ、この点、番組のジャーナリズムの姿勢を評価したい。9条の理想を純粋に体現したからこそ、こうした受難に遭遇したのであり、理想を追求することがどれほど厳しく難しいことを思わされたこと、事件の本質的意味に触れるコメントを述べた青木理も「佳」としたい。9条が内面化された求道的な平和主義者だったからこそあそこまで実践と挑戦をやり抜いたのであり、偉業を成し遂げることができたのだ。世界中から尊敬されるリーダーとなり、崇拜される聖人となったのだ。

9条への強いコミットがあり、9条の理想を実現する主体たろうとする意思が貫徹されていたところに、中村哲の人格があり、人の心を打つ精神の情熱と行動の気高さがある。戦後民主主義の日

本が育んだ人間の理想像がある。（冒頭部分のみ）

中村哲という人格をつくったもの 高世仁 （ジャーナリスト）ブログ 2019-12-10

以前から自民党は中村さんを煙たがっていた。/中村さんはアメリカのアフガン空爆に強く抗議し、日本がその戦争に協力することにも反対していた。9.11の1ヶ月後、01年10月13日、中村さんはテロ特措法の審議にかかわって国会の特別委員会の民主党の参考人として呼ばれた。その時のことを中村さんは著書にこう書いている。《「不確かな情報に基づいて、軍隊が日本から送られるとなれば、住民は軍服を着た集団を見て異様に感ずるでありましょう」「よって自衛隊派遣は有害無益、飢餓状態の解消こそが最大の問題であります」この発言で議場騒然となった。私の真向かいに座っていた鈴木宗男氏らの議員が、野次を飛ばし、嘲笑や罵声をあびせた。司会役をしていた自民党の亀井（善）代議士が、発言の取り消しを要求した。》（『医者、用水路を拓く』（石風社））/国会に呼ばれた参考人に「発言の取り消し」を求めるとはむちゃくちゃだが、こうした発言は9.11直後のテロリストをやっつけろという雰囲気にも包まれていた日本では非常に勇気のいることだった。しかも中村さんは爆撃されるアフガンにいただけの説得力がある。政府・自民党は中村さんを目の敵にした。http://takase.hatenablog.jp/entry/2009-0826タリバン政権崩壊の後、日本政府はアフガンの復興、民生安定を掲げて、莫大な援助金をアフガニスタンにつぎ込んだが、草の根で大きな成功をおさめていた中村さんのプロジェクトを全面支援することはなかった。それでも中村さんの偉大な功績は誰も否定できないのだから国を挙げて本当にごくろうさままでしたと迎えるべきなのではないか。安倍政権になってこうした大人げない狭量さが目につく。

ウクライナの悲劇を体現 八千草薫が魅せる圧倒的な存在感 地人会新社「これはあなたのもの 1943-ウクライナ」（山田勝仁演劇えんま帳）「日刊ゲンダイ」2017/06/

共謀罪が成立し、軍靴の足音が空耳ではなくなってきた日本。戦争がいかに普通の人々を苦しめ、心に生涯消すことの出来ない傷を残すか。それはノーベル化学賞を受賞した本作の作者ロアルド・ホフマンによるこの自伝的作品に通底する深い“無常観”からもわかる。/舞台は1992年のアメリカ・フィラデルフィアに住むプレスナー家の居間。第2次大戦中、ユダヤ人であるため、生まれ故郷ウクライナの小さな村でナチスの迫害に遭った一家は戦後、渡米。エミール（吉田栄作）は内科医として成功し、母フリーダ（八千草薫）、妻タマル（保坂知寿）、そしてエミールの長女ヘザー（万里紗）、長男ダニー（

田中菜生)と平穩に暮らしている。

そんなある日、ヘザーが高校の課題でナチスのホロコーストを取り上げ、フリーダにウクライナ時代の迫害の実態を尋ねる。しかし彼女はかたくなに口を閉ざす。ユダヤ人であるプレスナー家は戦時中、ウクライナ人のオレスコ家に助けられ、「金銀宝石」と引き換えに屋根裏部屋にかくまわれていた。そんな時、オレスコ家の長女アーラ(かとうかず子)がフィラデルフィアを訪れる。両親の遺品の中にある物を見つけフリーダに届けに来たという。彼女が届けたものは何か、そして半世紀近い時間の流れのよどみから浮かび上がる記憶と真実とは…。/1992年のアメリカと1943年のウクライナの屋根裏部屋を往還しながら、戦争の惨禍と人間の業に迫る“もうひとつのアンネの日記”。大国の思惑で、翻弄されてきたウクライナの悲劇を体現する八千草薫が風格ある演技で圧倒する。静かなたたずまいから発せられる激しい言葉のつぶてが観客の胸に鋭く突き刺さる。/果たして憎しみの連鎖は断つことができるのか。それはハイトスピーチが横行し、共謀罪により新たな戦前を迎えた今の日本に課せられた問題でもある。「裁きの後で忘れることも赦しのひとつ」「しかし国は忘れてはいけない」とタマルが言う。/解答を強要しない脚本。観客一人一人に「赦し」の意味を問いかける鶴山仁の真摯で静謐な演出が胸を打つ。吉田、保坂、かとうの練熟の演技に伍して万里紗の歯切れのいいセリフとみずみずしい演技が光る。田中も大健闘。訳=川島慶子。[八千草薫 [1931-2019.10.24] は2017年5月-6月 この舞台劇に出演した]

二つの手術を乗り越えて



2年前の夏、リウマチで人工関節に置換してあった左の肩から、細菌が発生しました。それを治療するには人工関節を抜去しなくてはならないのですが、大変な手術のため、それを引き受けてくれる先生がおらず、ようやくK病院のY先生が引き受けてくれることになりました。Y先生は、よく患者の話を聞いてくれる方で、外来の時はいつも時間がかかって午前中の予定が終わるのは午後2時~3時になってしまうことが普通です。

最初、内視鏡で人工関節周りを洗浄する手術を終えた時、私が「細菌が抜けましたか？」と聞くと「追い出しましょう」と励ましてくれました。

2年たった2019年の8月頃、やはり、細菌が再び出てきて、いよいよ抜去手術をしなくてはならなくなりました。ここで問題なのは、完全に抜いてしまうと、腕が垂れ下がり、車の運転は諦めなくてはなりません。手術前、Y先生は「2年間悩みましたよ」といったのです。ここが、Y先生の素晴らしいところで、一人の

患者の手術のことで本人以上に考え悩んでくれたのです。6時間にわたる手術の末、素晴らしいことが起きました。100パーセントではありませんが、40度の範囲くらいで上腕が動くではありませんか。先生に聞くと、股関節の抜去手術に使うビーズという手法を初めて肩関節に応用したのだそうです。

1ヶ月入院しましたが、前述の整形外科の手術後、目の状態がおかしくなり、私は6時間の手術の時の麻酔の副作用かと思っていましたが約30年前の下垂体腫瘍の切除の痕が再び拡大して視神経の束を圧迫していることがMRI検査で分かり、今度はS脳神経外科病院にかかり手術となりました。

手術前々日、色々心配して眠れぬ夜を過ごしましたが手術してくださる主治医のT先生がたくさん手術を経験し信頼できることが分かりました。また、パソコンの画像を使って説明を受け、心配が解消されました。最新のMRIの画像で自分の鼻から下垂体までのルートが克明に示され、ナビゲーションの機能も借りながら手術を行うそうです。しかし実際の手術は5時間を超え、付き添いのみなちゃんは心配したそうです。後で聞くと古い腫瘍が硬くて神経に固着していたそうです。ともかく無事に手術は終わりました。手術後私は目が正しく見えるようになり、「ありがとうございます」とお礼をいいました。退院2週間前は、夜中にシリウスが2つに見えたのが、退院1週間前にはちゃんと1つに見えたので嬉しかったです。こうして、視力が回復し、傷跡も癒えるのを待って1ヶ月後に予定通り退院しました。

2つの手術は共に、5~6時間にも及び、それを受けようとする私自身にも試練となりました。不安や眠れぬ苦しみ、看護師や他のスタッフ、執刀してくださる先生に囲まれながらも、手術を受ける私はしょせん一人の人間、多くの不安を抱えることは否めません。

期せずして二人の方から同じようなメールを頂きました。みなちゃんの友人、科学者の小野有五先生からは「大変な大手術なのですね。成功をお祈りしています。神さまには、望むことは何でも、お祈りしなさい、と聖書に書いてあります。そうすれば、人智を超えた神さまの平和が、あなたに与えられるでしょう。と聖書はいうのです。不思議な言葉ですが、ほんとうに深い真理を感じます。どうか神さまの恵みが、澄生さんとみな子さんの上にありますようにとお祈りしております」「神さまが与えてくださるのは、人間の勝手な思い、願いを超えた『平和』なのです。しかもそれは、ただ与えられるのではなく、それが、あなたの心と考えを守ってくれる『平和』だ、ということです」。私の古くからの友人Hくんからは「樋口君が自分で思い描いている事と自分に起きている身体の状態が、相反する現状に非常に不安で辛い気持ちでいると思いますが、これを乗り越えていくのも樋口君の人生なのだと思います。慰めることもできませんが、でも『神様は乗り越えられな

い試練は与えない』という言葉があります。私は神さまを信じているわけではありませんが、この言葉はその通りだと思っています」。

特に2回目の手術は、脳の真下に頸動脈が走っていて、やはり気を付けなければならない手術であるようで、手術前は眠れぬ夜となりました。自然と不安な思考になっていきました。そんなときお二人のメールを思い出し、「静かに明日を信じて待つ」という気持ちになれたのは大きかったと思います。母がよく言っていた「明日のことは思い煩うことなかれ」「野の草を見よ」（正しくどういのかは知りませんが）という言葉は何度も念じていました。

2つの手術を終えて、生きていることのありがたさを噛みしめています。リウマチの痛みは続いています。また天体観測ができる日を楽しみにしています。（樋口澄生）

《戦前回帰？「ヤジ排除」から考えるニッポンの今とこれから メディア編》を企画して



ヤジ排除報道がなぜ遅れたかについて、「朝日新聞の記事を読んで、これは問題だと気づきました。事件当初は、首相の警備はこれくらい厳しくても

日本のメディア状況を語る韓永學教授

普通なのかな、とっていました」とマスコミの方が学習会でこう話されるのを聞いて、とても驚きました。朝日新聞が書かなければ、この事件誰も知らなかったかも！ということは報道されないだけで、似たようなことが他にも起きているかもしれない。（※）報道される事件とされない事件の違いは何か。マスコミ内部では、人権についての教育があるのかどうか、を知りたいと思い12月1日（日）にシンポジウムを企画しました。

シンポジウムでは、『メディアと権力』『メディアと市民』の二つのテーマで、現役のテレビ局の方、全国紙・地方紙OBのお二人、フリーのドキュメンタリー監督、ヤジ排除当事者の方にご登壇いただき、そのお話を踏まえて北海学園大学の韓永學（ハン・ヨンハク）先生に日本のメディア状況について、海外との比較も含め、体系的な分析をしていただきました。

『メディアと権力』では、★テレビ局・新聞社双方とも、1、2年前までは人権について教える社員教育はほとんどされておらず、仕事の仕方はOJT（オンザジョブトレーニング）という形で先輩から現場で学ぶことが殆んど、ということ。★若い記者の中には、「ヤジる」ことそのものによいイメージを持たない人がいること。★テレビ局は電波法により、政府が認可権を持っていること。★日本の放送界は一応業界横断的な自律機関BPO（放送倫理・番組向上機構）があるが新聞界はBPOに相当する機関がないこと。★ヤジ排除の現場では、報道関係者が警察になめられ

ているように見えたこと。その原因として、大手マスコミしか入ることができない「記者クラブ」の存在が大きいこと（なんと、「記者クラブ」というのは日本だけの制度で、英語で表記される時も“kisyu club”とされているそうです）。記者クラブに入れないフリーのジャーナリストは、あからさまに警察から排除されたり取材を拒否されたりすること。

★警察の記者クラブは他に比べ特に閉鎖的な上、以前は警察署内をかなり自由に取材していた記者クラブ加盟の警察担当記者でさえ、今は入り口で警察からの情報をもらうのみで中には入れない状況になっていること。などが話題にのぼりました。

続く第二部の『メディアと市民』では、日本での、市民とメディアとの遠い関係も見えてきました。韓先生によると、いくつかの国では、公共の電波で市民が自分たちの番組を放送できる枠があるそうです。また、「公共放送」であるNHKが、ヤジ排除事件について8月になるまで一切報道しなかったこと、首相と懇意の人が幹部に選ばれたり、政権有力者が事前に番組をチェックする事件が起きていることなどでも、「公共」が名ばかりの実態を表しているようでした。

市民側も、民間・公共含めて数社しか認可されていない、貴重な放送枠は自分たちのためにあるべきだ、という意識が薄いということに気づきました。

また、メディアと市民の意識のずれも感じました。警察担当の記者は、「犯人の車種」などの些末な情報を他社より先んじて報道するために警察に気を遣うそうですが（←記者がナメられる原因？）、市民が知りたいのはその犯罪が起きた背景や社会的要因などの調査報道ではないでしょうか。今回のように直接対話する場が増えることがその「ズレ」を埋めていくことになるような気がしました。

時に、マスコミは第三の権力、市民は第四の権力、と言われるそうですが、本来、市民の立場は「第一の権力」。シンポジウムで皆さんのお話を伺って、“主権者意識”を市民自身が持つことが、ヤジ排除を許す土壌を変えていくのではないかと、という思いがふつふつとわいてきました。（水上さえ 市民イベントグループwhat's）<https://whats-everything.jimdofree.com/>

※実際、旭川市で4か月も前のピラマキで逮捕されたり、福岡市で友人に12000円貸した人が貸金融業法違反で逮捕される事件などが起きていますが、ヤジ排除事件のように報道されていないようです。これらの事件は人づてに聞いたのですが、事実を確認したくてネットで探しても、ニュースページが削除されていることが多く、こちらのサイト以外では見つけることができませんでした→「福岡市民救援会」<http://blog.livedoor.jp/ukukyuen/>

本 Books



ザ・ソウル・オブくず屋
SDGsを実現する仕事

東龍夫著 コモンズ出版社
1,870円

2011年に東日本大震災が起き福島原発事故まで引き起こしました。日本の気象異常が深刻です。台風の大型化や激しい地震が世界各地で起きています。

私は長く反原発や、自然保護の市民運動に関わってきました。資源回収にも協力してきたつもりでいましたが、回収されたペットボトルがリサイクルされるのはたった25パーセント程度であること。アルミ缶は「電気の缶詰」と言われ、製品になるまでにたくさんの電気を使うことを知りました。東さんは、持続可能な社会になるために自分のできるところから始めようと提言します。かなり前ですが、ドイツの環境保護の取り組みについて、ドイツ在住の環境ジャーナリストの今泉みね子さんの講演を聞いたことを思い出しました。リサイクルよりリユースが積極的に進められていて、ビン詰めされた飲料水などは、お店に返すとその分の料金が戻ってくるシステムが紹介されました。日本も見習ってはどうかと思いました。私がひとつだけ実践しているのは、食器洗いに粉せっけんを使っていること。少し値段は高いですが手荒れもせず、何より水を汚さないのがいいです。プラスチックを減らすためにマイボトルから始めてはいかがでしょうか。持続可能な社会にするには国全体で考えていかないと、大変な事態を招きます。危険な原発だけは廃止したい。本書から被災した福島にも何度も支援に行った東さんの人柄にも触れることができました。

ユニクロがオープンした頃、家族分のフリースを買ったことがあります。でも海外の安い労働力で作られていることを知ってからには買わないやめました。東さんはバングラディッシュの工場で「時給22円」で作られていると指摘します。まるで戦前の「女工哀史」ではありませんか。東さんは、資源回収の仕事に、多数の精神障がい者を雇用してきました。『障がいのある人もない人も地域で共に生きる』ことを実現するためには、中小企業こそが大きな役割を果たせるはず。そして、営利を目的にした企業としてだけでなく相互扶助を目的にした生業としての仕事が地域で多様に広がるのが、その理想へ至る道だと思う」と述べています。京都にさまざまな環境技術が取り入れられた「懐かしい街屋」の模型があることを紹介。「くず屋」も懐かしい風景の一員になれたらと書きます。それは、若者も障がい者も、お年寄りも、持続可能な社会で共に生きていける社会ではないかと、希望のある道を教えられました。



暗黒のスクन्दル国家

青木理著 河出書房新社
1,815円

本書は「抵抗するジャーナリズム」を追求する青木理さんがさまざまな雑誌や新聞などに掲載されたコラムに、新たな書下ろしを加えた時評集です。

青木さんは「サンデーモーニング」のコメンテーターの一人をつとめていて、ニュースでは報じきれていない、政治の動向、社会の風潮など硬派な話題に、ジャーナリストとして、切れ味鋭くコメントしています。特に政権批判は的を得ていて、もやもやした気持ちがすっきりします。その「サンデーモーニング」で長くコメンテーターを務めた岸井成格さん追悼の文で、進行役を務める関口宏さんに訊いています。青木さんが「この番組に対する最近の世の中の受け止めは違うようだ」という問いに、関口さんは「それは世の中が変わっちゃったからでしょう。周りにいた仲間がどこかに行ってしまって、われわれだけが取り残されたような感じ。昔は言うべきことはきちんと言っていたはずなのに、そんなヤワなことでいいんですか、と感じるような番組が増えた。岸井さんだって、いろいろと闘いつつもバランスはきちんと取っていましたよ。ところが、それが見えなくなりました。世の中が変わったからだと思います」と答えています。今、岸井さんが果たした役割を青木さんが担っています。「『ごく真っ当な番組』の松明を守らなくてはならないという思いは共有している。それが岸井さんへの何よりの追悼になる」と書いています。

植村裁判で青木さんを講演にお呼びした時にも、安倍政権の歴史修正主義を痛烈に批判しました。

情報隠蔽、文書改ざんや、廃棄、嘘がこれでもかと次々と明らかになっても「その質問には答えられない」と突っぱねる姿は醜悪です。メディアはどう報じてきたかも明らかにしています。

「日々新たに生起する出来事や問題に追われ、没頭し、あるいは翻弄されているうちに以前の出来事や問題がそれに上書きされ記憶や問題意識が薄れ、いつのまにか過去のものとしてしまう。現政権などは常にそれを企み政権の推進力としてきた」「さまざまな記憶を喚起し、思考を整理して、問題意識を再共有してくれるなら、著者としてこれにこれに勝る幸せはない」とあとがきにあります。民主主義を取り戻すには、真実を知り、一人ひとりが今の政権にNO!を突きつけなくてはと励まされました。

生きとし生けるものへの賛歌

『山懐に抱かれて』

樋口 みな子

札幌映画サークル
シネアスト2
2020年1月号
掲載

岩手県下閉伊郡田野畑村で、自然の力で安全な牛乳を生産したいと「山地酪農」を実践している父・公男さん、母・登志子さんと5男2女9人の吉塚一家の24年を追ったドキュメンタリー映画です。（遠藤隆監督・テレビ岩手が独自に取材し放送を続けてきたテレビ番組に追加取材と再編集を加え、開局50周年記念映画として公開。）

ランプ生活からスタートした暮らしは理想に燃える父が山を切り開き、牛も人も山の自然に抱かれて生活しています。父母と一緒に汗を流すことをいとわない子どもたちがなんと生き生きとしていることか。ゲームに熱中する子どもたちとは別世界で、何度も目頭が熱くなりました。年収はたったの100万円。借金は2000万もあるというのも驚きでした。環境に負荷をかけない酪農はもっと評価されていいはず。初めは50本しか売れなかった「田野畑山地酪農牛乳」は美味しさに加えて、吉塚さんの正直さにたくさんの支援者が増えていきました。

長女、長男、次男は大人になると、父のめざす酪農に敬意を表しながらも、自分の道を探したいと激しくぶつかり合います。私も子どもたちが正しいと思えました。牧場を大きくしたいという父に経営状況を知っている長女、都は、「家族が食べられなくなった時にどうするの」と、反発します。ある冬の日、牛舎に牛たちが入れられていました。長男、公太郎は冬のうちだけでも小屋で育てる方が牛にストレスがかからないと思ったからです。「山地酪農じゃない。お前のやり方をやりたいなら自分の牧場を持って他でやれ」と父は猛反対。2011年3月11日に東日本大震災が起こり、牛乳生産はストップ。牧場は放射能の影響を考え、何度も検査を重ねました。翌年、山地酪農牛乳は家族一丸となって震災を乗り越えます。しかし次男、恭次は自分のやりたい酪農をと、北海道に妻と移転。政治家が嘘や改ざん、大事な資料まで捨ててしまう時代に、頑固だけど、正直に生きる家族の姿に、豊かさとは何か、家族とは何かと強く訴えるものがありました。

私の祖父母は、淡路島から北海道の日高、沙流郡平取町仁世宇に入植した開拓農民でした。山奥の一軒家に祖父母と子どもたちが農作業を手伝って暮らしていました。その長女が私の母です。厳しい農作業が吉塚家と重なり、懐かしさがこみ上げました。母は、担任に女学校を勧められ札幌に来ました。生まれて初めて食べたソフトクリームの美味しさが忘れられないと語ってくれたことがあります。

好奇心旺盛な私がまだ6歳のころ、叔母たちが通う中学校に連れて行ってもらったことがあります。授業中は、絶対に机の下から出ないことを約



束して、カリンズを食べながら、神妙に授業を受けていたのですが、真っ赤なカリンズがパッと机の下を転がったのです。教室中が笑いの渦に包まれました。まるで映画のワンシーンのようですよ。映画の中で木に登ってヤマナシの実を取る子どもたちはカリンズをほうばる幼い私を見るようでした。清冽な沙流川と大草原が今も私の心の故郷です。

自然の美しさと厳しさに対峙し、パソコンもスマホも使わず、大家族が食事のときに「おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう。お父さん、お母さんありがとう。子どもの名前がつづき、牛さんありがとう。頂きます。どうぞ召し上がれ」の言葉は温かい。一つの宇宙ですね。苦しい時にこの映画に出会いましたが、素晴らしい家族から大きな励ましをもらいました。多くの人に観ていただきたいです。

アイたちの学校

高賛侑（コウ・チャニウウ）
監督

早くに札幌でも「アイたちの学校」上映会を企画できないかと声をかけられていました。で

も家庭の事情で観るだけで精一杯でした。関心のある映画サークルの会員の友人に声をかけたら、上映委員会を立ち上げ、たくさんの後援と協賛を得て、11月3日に札幌エルプラザで上映されました。300人近い人たちで会場はいっぱいになりました。

朝鮮学校の歴史と現状を描いたドキュメンタリーです。1910年の韓国併合から110余年。戦後、各地に国語講習所が設立されてから70余年。在日朝鮮人たちはさまざま差別と闘いながらもアイ（子ども）たちの夢を育てるため、朝鮮学校という幼稚園から大学にいたる民族教育事業を続けてきたのです。

2010年に日本政府は高校無償化制度から朝鮮学校を外し、地方自治体も次々に補助金を打ち切るなど、近年の朝鮮学校を取り巻く環境は厳しく、朝鮮学校は裁判闘争に立ち上がりま

の悔しさに私も涙しました。映画にも登場する元文部科学事務次官の前川喜平さんは、朝鮮学校の高校無償化排除や補助金廃止の動きを「国が率先して行っている官製ヘイトだ」と痛烈に批判しました。

朝鮮学校の生徒たちが、祖国の歴史を学び、スポーツや演劇、舞踊などに励み、堂々と自分の言葉で語る姿が素晴らしいと思いました。日本語で育ってきた朝鮮学校の小学生が、あっという間に朝鮮語を覚えて、堂々と話す姿に感動しました。力のこもったいい映画でした。高賛侑（コウ・チャニウ）監督自身も朝鮮大学出身で、ジャーナリスト、ノンフィクション作家としても活躍されています。

むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞に応募しました

ある方から応募を勧められ、10月末に期限ぎりぎりでしたが1年間の「銀河通信」を提出しました。読者のお手紙「一つひとつの文章を吸収して読みました。人としての権利を堂々と表現するあなたの感性の豊かさにならって、居場所の活動をしていきたい」に背中を押されました。（み）



人生をしまう時間（とき）

下村幸子監督

訪問診療医としてさまざまな患者の死を記録した、ノンフィクション「死を生きた人びと」の著者で森鷗外の孫でもある小堀鷗一郎医師と、在宅医療チームに密着したドキュメンタリーは、NHK BS1で放送され大きな反響を呼びました。

81歳の小堀医師は東大病院の名外科医でしたが、医師生活の最後に選んだのが、終末期医療の現場でした。埼玉県新座市の堀ノ内病院に勤め、看護師、ケアマネージャーたちと共に、患者や家族たちと寄り添いながら、さまざまな難問に向き合った200日間に新たなシーンを加えて映画になりました。

みな、住み慣れた自宅で息を引き取りたいと言います。私も、往診してくれる医師と医療チームが身近にあれば、どんなに心安らかに過ごせようと思いました。小堀医師は、自ら運転して、患者さん宅を訪ねます。さまざまな家族の姿がありました。一番印象的だったのは妻を看取った後に肺がんになった男性が、40代の全盲の娘に介護され、看取られるシーンでした。小堀医師はいつも「顔を見に来たよ」と、持ってきた椅子に腰かけて患者に話しかけます。秋たけなわのある日「先生そろそろ食べごろだから庭の柿を持って行ってよ」。そのかけあいが終わりを告げた朝、天高く赤々と実った柿をカメラがとらえ心にしみました。

家族に静かに看取られるのは理想ですが、まだまだ在宅医療は一般的ではありません。1時間半もかけて病院に通った経験から、病状が安定したら、自宅療養ができたならどんなに気持ちが安らぐだろうと思いました。夜遅くまで何らかの音が聞

こえて落ち着かなかったと夫は話していました。

家族を想うとき

ケン・ローチ監督

『わたしは、ダニエル・ブレイク』で引退を表明していた



ケン・ローチ監督。グローバル経済が加速している今、世界のあちこちで起きている「働き方問題」と急激な時代の変化に翻弄される現代の家族の姿に、「私たちがやらねばならないことは、耐えられないことがあれば変えること。今こそ変化の時だ」と新作を作りました。

家族のために少しでも豊かになりたい。マイホームが欲しいと、4人家族の父リッキーは、会社とは雇用関係は結ばない個人事業主として宅配の運転手をはじめます。しかし事業主とは名ばかり。1日、14時間も働かされ、最新の箱型の発信機で、行先や、荷物まですべてが管理されて、トイレに行く時間ありません。労働者の権利はまったくない奴隷労働でした。母アビーは訪問介護ヘルパーですが、仕事に使っていた車を売って、宅用のバンを購入したため、バスで遠くまで移動するのに時間を取られます。この移動の時間には賃金が払われないのです。訪問先でアビーは粗相して落ち込む老人を「私はあなたから学んでいる」と励ます場面があります。彼女の心やさしさは、随所に描かれます。懸命に働く父母ですが、高校生の息子セブや小学生の娘ライザと接する時間が無くなっていきます。聡明だった息子は非行に走り、警察に呼び出されます。しかし、緊急事態であっても上司は「罰金だぞ」と脅します。子どものために休みたいと申し出ても「代替の運転手を探せ」と。働けど働けど、暮らしは楽ならず、家族も崩壊寸前です。家族と幸せに暮らしたいだけなのに。さらには荷物を積んだバンが襲撃されて、リッキーは大けがをします。そんな父を少しでも支えようと互いを思いやる母と子どもたち。そんな気高さや優しさをクローズアップしています。

アビーが叫んだ「人を何だと思っているの！命の問題よ」が耳に残っています。ケン・ローチの真骨頂ですね。こんな働き方でいいのか？と鋭く問いかけます。日本でも貧困と格差が広がっています。非正規雇用が4割という厳しい現実にあえいでいます。家族まで破壊されるのではやり切れません。便利な生活を考えさせられました。

原題「Sorry We Missed You」は、英国の宅配便で使う不在連絡票のことだそうです。ラスト近く、リッキーはアビーに「あなたたちがいなくて、寂しく、恋しく思います」というメモを書いていく場面が秀逸。弱者に寄せる。ケン・ローチのまなざしの優しさに力づけられました。



東京新聞社会部の望月衣塑子記者に森達也監督が密着したドキュメンタリーです。

沖縄辺野古新基地埋め立て現場では、大量の赤土を

確認し、防衛局を厳しく問い詰める姿が圧巻でした。伊藤詩織さんへの準強姦事件がもみ消されたことに怒り、それを契機に菅官房長官の定例会見に出席し、忸怩せず、納得するまで質問を続けたことで有名になります。森友学園問題では籠池夫妻、近畿財務局OB、加計学園問題では前川元文部事務次官などに取材し、首相と側近による関与や隠ぺいに迫ります。

言論への圧力や萎縮が強まるなかで、望月記者は、さまざまな誹謗中傷にも心が折れない。ジャーナリストの役割は権力の監視と知る権利だと、ぶれることはありません。周りにたくさんの男性記者がいますが、望月さんは個として立っていてひととき存在感があります。なぜ明るく頑張れるのか知りたいと思いました。

望月記者の取材する姿を通して、日本のメディアの在り方が浮き彫りにされます。ひとりで闘う姿に、もっと他の記者も望月記者に続いてほしいと願わずにはいられませんでした。森監督はインタビューで「自分を滅して組織を優先すると、ジャーナリズムは衰退する」と語っています。個として、「あなたはどう生きるのですか？」と問いかけられました。

映画には出てきませんが、「軍事費が年々突出している」という東京新聞の記事を読みました。望月さんは「武器輸出と日本企業」という著書もあり、その取材力に感動しました。真実を追求したいという気持ちがなければ、いい記事は書けません。「記事良かったよ」というメールやはがきが、記者の意識を変えるのかもしれない。



イエスタデイ

ダニー・ボイル監督

何の予備知識もなく青春時代によく聴いていた「イエスタデイ」の題名

に惹かれて・・・。

突然起こった「全世界で12秒間の大停電」がきっかけで、ビートルズの曲を誰も知らない世界になってしまうという架空の設定をベースに、主人公ジャックと子どものころからの友人でありマネージャーでもある女性エリーとの恋愛を絡めたラブコメディでした。

ジャックはシンガーソングライターで、エリーに献身的に支えられています。全く売れず、音楽で有名になりたいという自分の夢に限界を感じていました。瞬間的な大停電が起こり、交通事故に遭ってしまうジャック。昏睡状態から目を覚ま

すと、この世には「ビートルズ」が存在していなかったことになっていると気がつくのです。「想像してごらん、もしビートルズが自分以外の誰も知らなかったとしたら」。ビートルズへのラブレターのような作品でした。

「ヘルプ」はビートルズの歌詞がジャックの気持と見事に重なり合い圧巻でした。「レット・イット・ビー」「抱きしめたい」「イン・マイ・ライフ」など思い出をよみがえらせる数々の名曲に涙があふれました。ジョン・レノンが活着しているという設定でおじいちゃんになった本人が出てきてびっくり。「愛する人に思いを伝えなさい。正直に生きなさい」と助言して感動しました。

ジャック（ハイムシュ・パテル）を愛するリリー・ジェームズ演じるエリーがキュートでした。子どもの頃から20年もジャックが好きだったと打ち明けるシーンが素敵。本業は数学の教師です。

夫の回復の兆しが見えて、嬉しくて立ち寄った映画館でハッピーエンドも良かった！



12月8日ジョン・レノン追悼コンサートで高校生のマット光さん（写真）が地球の危機的状況に関心を持ってもらいたいと

訴えました。帰りにエコバッグの販売をし完売しました。頼もしいですね。街頭で見かけたら応援お願いします。（み）

みな子の2019ベストテン

外国映画①記者たち 衝撃と畏怖の真実 ②グリーンブック③家族を想うとき④ぼくたちは希望という名の列車に乗った⑤主戦場⑥マイ・ブックショップ⑦バイス⑧存在のない子供たち⑨ブラック・クラズマン⑩共犯者たち

日本映画①新聞記者②福島は語る③米軍が最も恐れた男 カメジロウ不屈の生涯 ④作兵衛さんと日本を掘る ⑤記憶にごさいます⑥ぼけますのでよろしくお願ひします。⑦山懐に抱かれて⑧i新聞記者ドキュメント ⑨ひとよ ⑩洗骨

購読料と寄付をありがとうございます（敬称略）
2019.10.30~12.23

藤田春美 梅沢俊（カレンダーも）佐竹政治 竹内修一 遠藤浪子 片山篤子 糟谷奈保子 岩井善昭 齊木登茂子 高橋儂 小澤登美栄 ミツイパブリック（中野葉子）本の寄贈

高橋春枝

合計32,500円は印刷代と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。郵メール特約の送料が30円以上値上げし、発行が厳しくなっています。振込用紙を同封しましたのでご協力をお願いします。紙通信購読の方は02740-7-56535（年間1,500円）電子振込が手数料がかからずお勧めです。またwebに変更する方もお知らせください。